鹿沼に生きた人
生きている本

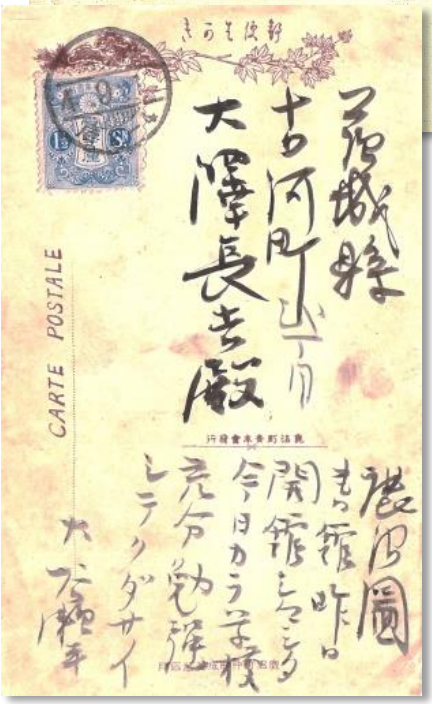
創刊号

～大谷瀬平と鹿沼市立図書館～

鹿沼の図書館の“生みの親”
十五代大谷瀬平

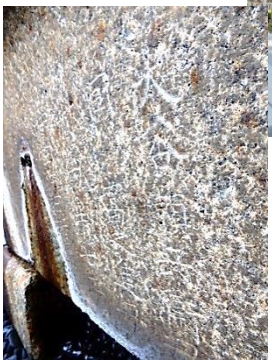
２０２０年2月

小さな旅クラブ　鹿沼



鹿沼図
書館昨日
開館シマシタ
今日カラ学校
充分勉強
シテクダサイ
大谷瀬平

鹿沼に図書館が開館された翌日（？）、
大谷瀬平から知人の大澤長吉なる人物
（たぶん親戚の小中学生などの年少者）
に宛てて出された絵葉書（鹿沼町青年会制作）。
写真右「鹿沼図書館内部」左「階上図書閲覧室」
大正４年９月１日の消印が見られる。



今宮神社手水舎
（上写真）の
礎石に刻まれた
初代町長・大谷瀬平
（寄贈者）の文字
（左写真）

①　鹿沼市立図書館の母体となる図書を大量に寄贈した大谷瀬平なる人物とは？

柳田芳男「かぬま郷土史散歩」
（平成３年４月28日・晃南印刷発行）

２、今宮町

７、鹿沼市立図書館

今宮神社前の中央公民館と併設している市立図書館は、前々項に記したように、大正４年、鹿沼尋常高等小学校内に設立された。大正天皇即位御大典記念事業の一環としてで、そのほか御殿山の運動場化とその取付道路の新設、今宮神社の臨時付け祭など、鹿沼町が奉祝にわいていた年である。

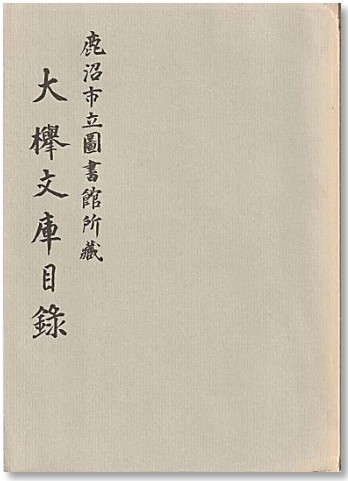
図書館設立の端緒となったのは、一に大谷瀬平蔵書の開放があったからである。書籍の収集家であった氏の屋敷内に大きな欅（けやき）があったので、その蔵書を大欅文庫（たいきょ）と称していたが、大欅文庫をベースに、青年会は町の有志に図書の寄贈をあおいだ。当時の青年会長は金子信次郎で、寄贈図書 2,118 冊（その大半は大欅文庫）、委託図書 816 冊、寄附金 400 余円であった。経営は青年会より当番幹事を定めて事務を処理した。

当時、県内の図書館は、明治 36 年に設立された足利学校遺蹟（いせき）図書館など 4 館にすぎず、鹿沼図書館は県下 5 番目である。大正 9 年、栃木県の図書館数は、全国第 45 位（下から 3 番目）という時代であった。11 年、鹿沼図書館の蔵書数は 2,790 冊、全国 1 館平均約 2,000 冊を上回っていたが、閲覧人員は 1 日平均 1.4 名と少なかった。開館日平均なら平均 5 名ぐらいにはなるかと思われる。

大正 13 年、皇太子御成婚記念として、青年会運営から鹿沼町に移管され、翌 14 年には公共図書館となった。

昭和 13 年の統計によると、蔵書数 3,181 冊、開館日数 220 日、閲覧人員 841 名、開館日 1 日平均 3.6 名となっている。16 年には、図書館は青年学校として使用されたため、中央小学校に蔵書等の管理を依頼して閉館せざるを得なかった。時は戦時体制下であった。

戦後 23 年に市制が施かれ、その記念事業の一つとして図書館創立時の建物を再び使用して、24 年 9 月に開館した。25 年度の蔵書数 4,021 冊、1 日平均閲覧者 57 名となっている。33 年、新市庁舎の建設により旧市庁舎は図書館に転用され、さらに 44 年には、同所に、市制施行 20 周年・明治 100 年記念事業として、鉄筋コンクリート 4 階建の中央公民館が新築され、その 3 階フロアに市立図書館が併設され、現在に至っている。（㊐平成元年 10 月睦町に新築移転）



「鹿沼市立図書館所蔵
大欅文庫目録」
鹿沼史談会
昭和 47 年 3 月 31 日発行

戦後の図書館は、30 年の巡回文庫、34 年の貸出文庫、37 年のマイクロバス改装による移動図書館、そのほか読書会、文学散歩の会・誌料刊行会など、館外活動を含め多様化している。

なお、47 年には、法政大学名誉教授長沢規矩也博士により、図書館所蔵の古書（和本・漢籍）の目録が作成され、その大部分を占める大欅文庫を標題とする「大欅文庫目録」として刊本されている。大谷瀬平こそ、鹿沼市立図書館第一の功労者というべきであろう。

１０、久保町

３、上都賀郡役所と鹿沼警察署

（中略）

明治 17 年の上都賀郡役所と鹿沼警察署の建設費は、郡内宿村の寄付金によりその大半がまかなわれた。1 戸平均、郡役所は約 50 銭、警察署はその 3 分の 1 で、鹿沼宿の場合は分限割で賦課された。また、その敷地は大谷瀬平ほか 2 名からの寄付によった。当時、上横町通り（現銀座通り）は大通りと丁字路になっていて、当局はその突き当たり（現神明通り）に庁舎を予定していたが、寄付を申し出た地主大谷瀬平の意向により、やや北に立地せざるを得なかった。

４、大谷家と大谷瀬平

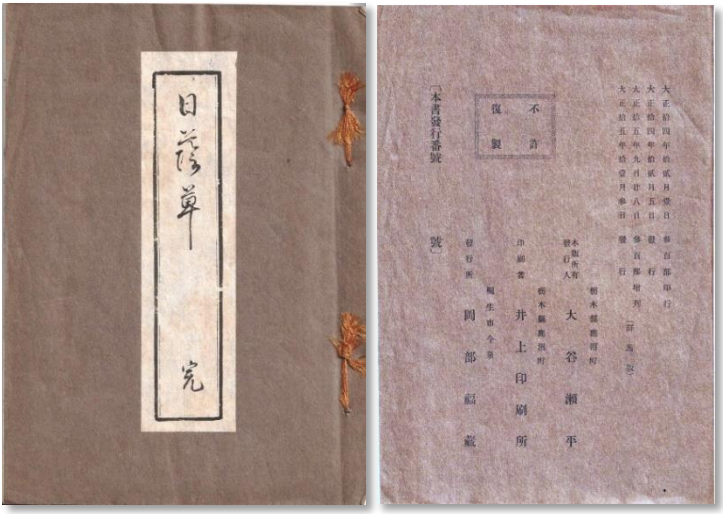
前項の瀬平は、明治 22 年、市・町村制施行後の初代鹿沼町長に就任した人物である。大谷家は、壬生家旧家臣で、鹿沼宿草分十七人百姓に名を連らね、仲町山口家とともに今宮再建に尽力して今宮代官といわれ、慶長 13 年の今宮棟札に名の出ている大谷常喜斎を、その 2 代目としている宿屈指の旧家である。大谷家中興の 5 代目宏幸の奉納した石灯籠(とうろう)1 対が今宮社頭にあるが、この代から瀬兵衛（明治以降は瀬平）を襲名するようになる。代々、年寄役に就いているのが見受けられるが、幕末の 13 代瀬兵衛は、郷村取締格帯刀御免となり、また芦洲(ろしゅう)と号して絵をよくした。14 代が初代町長となった瀬平である。

氏は、嘉永 5 年に栃木町の豪商釜佐こと善野佐治兵衛の三男として生まれ、夫婦養子で大谷家に入った。「菊廼(の)井」銘の酒造を家業とする大谷家は、氏の几帳面の性格から産を殖やし、後に大地主選出の郡会議員になっている。酒豪のためか、明治 36 年に脳溢血(のういっけつ)で亡くなっている。

明治 20 年生れの 15 代瀬平は、若くして家を継いだ。蔵書家である父の影響からか、当時、地方では貴重な書籍をも収集していた。先代から、屋敷内の欅の巨木にちなんで大欅(たいきょ)文庫と称していたのを、大正 4 年に御大典記念事業として中央小学校内に図書館が開設された際、寄贈している。明治 36 年設立の足利学校遺蹟図書館などについで、鹿沼図書館は県内 5 番目の設立に当たるが、蔵書数では当時第 4 位であった。（寄贈図書 2,118 冊、委託図書 816 冊）、大正 13 年に鹿沼町に移管され、町立、市立図書館と推移して現在に至っている。当初の貴重書の大半を寄贈した瀬平は、鹿沼市立図書館第一の功労者というべきであろう。なお、そのときの古書（和本・漢籍）は、昭和 47 年に法政大学名誉教授長沢規矩也博士により目録が作成され、「大欅文庫目録」として刊本となっている。また、南朝の忠臣藤原藤房（喜久沢神社祭神）が見野に隠れ住んだいわれを記した「日蔭草」を復刻している。

一方、小学校には番傘を、消防組には刺子(さしこ)を、それぞれ毎年寄付し、鹿沼農商学校の優等卒業生には銀時計を贈っていたなど、文化、教育、公共、

慈善事業に打ち込んでいた。昭和4年、久保町から今宮町に通ずる道路新設（神明通り）に対し用地を寄付したことも、その一環であった。



霊玉著「日蔭草」表紙と奥付
（木版所有・発行人　大谷瀬平、大正14年12月5日発行）

事業としては、大正のころ、鳥居跡町に大谷園芸場を開いている。大通り西側で現在の富士見通りにかけて、当時としては珍しい西洋野菜や草花類を大規模に栽培していた。花壇・菜園間は、両側をビール瓶の底を1列に並べた道で仕切って、見物人に楽しい散策が出来るように気を配っていたという。しかし、トマトを「気狂いナス」といわれていた時代で、約10年にして閉場している。

新し好きと言おうか、瀬平は、電話番号は1番（明治41年）、自動車も自分で乗りまわしていた。大男として栃木県20傑に入り、親分肌で豪放磊落（らいらく）な性格は、「旦那」として町民に慕われ、お人よしと言われるほど世話好きで面倒見がよかった。年末になると、久保町の人たちは、瀬平が一戸一戸、暦を無料で配ってくれたことを思い出すという。

元旦の初もうで、10日の今宮神社の春渡祭（おたりや）、それと21日の花市は、1月の寒さの中にあって、人出でにぎわう歳時である。花市は、以前は旧正月12日に行われた。そのもとをたどると毎年旧正月12日に、その年の最初の市（いち）（品物の売買を行う所）、すなわち初市が立ったことから由来している。そして、その場所は大谷家前の大通りであった。その日は、今宮権現（神社）から市神をうつし、はじめは、権利をもっている10人だけが、

板戸１枚ずつ１列に店を出すことが出来た。その見世賃（場所代）は大谷家に納める習わしであった。

大谷家は、上横町通り（現銀座通り）が大通りに突き当ったところに位置していた。昭和４年に、大谷家の屋敷を二分して、今宮町通りに抜ける道路が新設され、大谷家の氏神である神明宮の名をかりて神明通りと称した。現在の中半食堂と叶屋ストアの間に石畳の狭い道があり、それが大谷家への入口であった。入って右手に居宅があり、奥は広い庭で、左手に上蔵、右手に下蔵が軒を並べ、そのうちの一つが今も今宮町通り南角（島野氏宅）に残っている。

神明通り開通以前に、大通りと今宮町通りを結ぶ道は、大谷家の北側にあって、屋台がやっと通れる程の狭い道であった。その北側は、低い土手があって上都賀郡役所（庁舎）と鹿沼警察署の敷地となっていた。その道際、大谷家屋敷内に欅（けやき）の巨木があった。大谷家氏神である神明宮の傍らにあり、その神木でもあった。目通り直径１間（1.8 メートル）以上もあり、大谷の欅として有名であったが、うつろがあって倒木の危険のため、昭和８年に切り倒してしまった。その材を使用した奉納額が神明宮に揚がっている。また、２代目の欅を育てたが、これも伐採して今はない。

神明宮は、以前は東面していたが、現在は松尾社と並んで鞘（さや）堂に入り、南面している。大谷家は、かつて酒造業であったので、酒の神とされる松尾社を祭っているわけだが、堂内に酒蔵の棟札が２枚あり、それによって元禄年間（1688～1704）から酒造業を営んでいたことを知ることが出来る。神明宮の祭日は 11 月 15 日で、里芋を入れた赤飯をお参りにきた人にくばっている。なお、鞘堂内に、昭和４年に鹿鳴連があげた俳句の献額がかかっている。

大谷家は、瀬平の四男潔氏が、同所において大谷医院を開業している。その応接間は、鹿沼警察署の北側にあった消防ポンプ小屋を移して大谷家の長屋とし、さらにそれを分解再築したものである。昭和９年、県訓令により消防組の編成替えがあり、鹿沼町も 11 部制が６部制になり、自動車ポンプ２台が配備され、それにともないポンプ小屋を改築することになり、

「鹿沼町商工名家案内図」（大正２年 11 月９日発行）より

古いポンプ小屋を大谷家に払い下げたわけである。

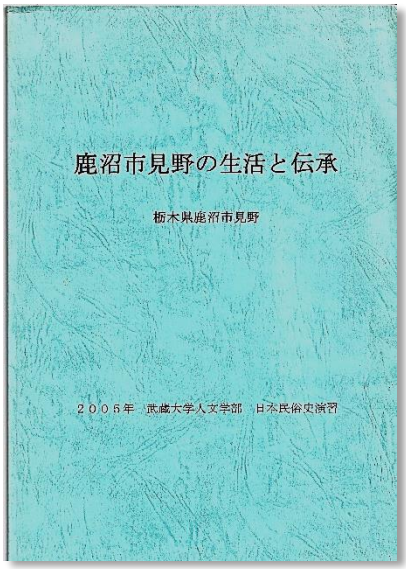
② 大谷瀬平が復刻した「日蔭草」に記された、見野の喜久沢神社の伝説について。

武蔵大学人文学部日本民俗史演習「鹿沼市見野の生活と伝承」
（2006 年３月発行）

２．喜久沢神社

由来・遍歴：

南北朝時代に南朝・吉野朝廷で高位にあった藤原藤房（ふじふさ）が朝廷を追われ隠遁して僧となり、のちに菊沢の地に隠れて草庵（現「不二庵」）を建て、使者から情勢を聞き込みながら余生を生き、没した。のち明和 4（1767）年に草庵付近で起きた山崩れによって地中から藤房卿の遺物と思しき古鏡・古銭などが出土、付近の寺・長光寺に保管された。遺物は一時期京都妙心寺長寿院に移されたが弘化 2（1845）年に長光寺に戻り、同 4（1847）年に村人が山崩れの跡地に社を建てて藤房卿を祀った。



時代が下り、明治初期に（政策の影響か）この社が長光寺から分離され、同 5 年には菊沢の地に因んで現社名となる。更に同 7 年、菊沢の広範囲で信仰されていたためか、県社に列せられた。

社寺の分離・県社指定など“神社”としての成立が明治初期と些か遅い時代であるため、社の歴史は他社より比較的浅いといえる。また、県社の頃は有人であったと思われるが、現在は無人である。

尚、藤房卿を祀った理由は定かではないが、弘化 2 年の遺品の出土が契機であ

ることはほぼ間違いないだろう。

氏子の範囲・戸数：

現在の範囲は相当広く、菊沢全域に相当する。具体的には黒川・行川（なみがわ）・武子（たけし）川流域で、武子・栃窪・千渡（せんど）・高谷（こうや）・仁神堂（にがみどう）の「東部」と、見野・富岡・玉田・下遠部（しもとおべ）の「西部（さいぶ）」地域である。戸数にすると、菊沢全域の戸数の半分にも及ぶ約 2,000 戸となる。

祀られている場所：

現所在地は“見野 1542”。山の中腹で、長光寺の寺域にある。以前は現在地より高所にあったといわれているが、所在は不明。

伝承：

藤房卿はこの地に流れ着いて樫の木を植え、その木が身の丈 30 メートルの巨木となったと伝えられている。その木は「つくばねがし」と呼ばれ、県の天然記念物に指定されている。「つくばねがし」は平成 13 年 6 月 29 日に自らの枝の重みで折れ、現在の、曲線が印象的な盆栽のような姿になったという。

③　喜久沢神社が発行した御祭神、万里小路藤房についての記述。（後尾に大谷瀬平の名が登場する）

「喜久澤神社雑話」
（昭和７年１月21日・喜久澤神社社務所発行）

一　御祭紳と御鎮座地

御祭神は萬里小路中納言藤原藤房卿であります。

笠置の山の行在所寄する雲霞の敵兵に行方も知らず落ち給ふ君の御供に仕へしは藤房季房唯二人、と云ふ藤房卿こそは萬里小路藤房卿であって、後醍醐天皇に御仕へになられた御方であります。

藤房卿のことは大平記、吉野拾遺、塵塚物語、龍寶山大徳寺誌、正法山妙

心禅寺記、續本朝通鑑、國朝諫諍録、太平記評判私要理盡無極鈔、新編常陸國誌、山城志、その他數多の書に記されてあります。

藤房卿は初惟房といはれ、後醍醐天皇に仕へ奉り大いに忠誠を盡され屡天皇を諫め奉られたが、聴き容れられなかったので官をすてられ、その後京都の岩蔵に入り僧となられ其後行方を明にされなかったとも、或は越後の鷹巣山に見えられたとも云ひ、又他の處に行かれたとも云はれてゐます。

御鎮座地は栃木縣上都賀郡菊澤村大字見野字山根キクサワでありまして、もとは下野國都賀郡西見野村字山根キクサワと云ってゐました。

此の地の言傳によりますと藤房卿には此のキクサワに庵を営まれてここに居られ、天下國家の安泰を思ふ一念から或は東或は西にとあるかれ、天下の様子を聞かれたのです。

それでキクサワの名も起つたと言はれてゐます。

嘉永に記された下野國誌には菊澤山と記してあります。今の菊澤村の名もこれからとったのだそうです。

二　御祭神の御遺物

神社の御鎮座になる所はキクサワと云つて、もとは長光寺（都賀郡西見野村字山根）の境内地でありましたが、丁度明和四年正月に霖雨があって澤から大水が出たことがありました。

その時山の一部が水の為に崩されて、そこから藤房卿の御遺物が発見されたのです。

その時発見されたものは日蔭草といふ本によると、三重塔壹基、古鏡壹面、錢九百九拾壹文などです。三重塔は高さ七寸程のものであり内に観音の像があり、鏡は柄のついてゐる圓い鏡であって長さ七寸程のものであり「寶祚興久」「藤三位資通卿公冥福」「藤従一位宣房卿公福壽」「興国四年」「不二行者授翁敬白」等の文字が刻まれてゐます。

如斯ものが発見されたので長光寺に於ても 領主松平豊前守に届出で、又松

平豊前守からは老中松平右近将監へ届出てゐます。その結果珍らしい重寶であるから長光寺に於て大切に守譲致すことになり、年一回領主が改めると云ふことになったのです。
言傳へによると明和四年の山崩れの時右の品々の外に印とか鏡其の他の物も一緒に発見されたのでありますが、発見の際来合せた人々が貰ひ受けて家に持ち帰ったとの事で、現に鹿沼町大谷瀬平氏の所蔵してゐる観音像の付いてゐる鏡様のものもその時のものだといはれてゐます。御遺物は日蔭草にも記されてあるが、壺に入れてあったのであってその蓋に平ったい石がのせてあったのです。

④　昔話もある。

鹿沼のむかし話を集める会「子どものための鹿沼のむかし話」
（昭和 51 年８月 31 日発行）より

笛吹き河原

小　杉　義　雄

今から　およそ 700 年前のある年の秋の夕暮れ時だった。
「おや？　きょうも聞こえてくる」
野良仕事を終え、家路へ急ぐ村人たちは足をとめた。うっとりとするような笛の音が、黒川べりから風にのって流れてくる。きのうも、おとといもかすかには 聞こえてきた。だが、きょうは風のせいか、一きわはっきりと聞こえてくる。しかも、その調べは見野の村人の心に何かを訴えてくる。

「だれだろう？」
村人たちは顔を見合わせながらかついでいた鍬をおろした。あやしみ、いぶかりながら足音をしのばせて、川岸に出た人たちは目を疑った。

東の空にのぼる満月の光をあびて、まばゆいばかりの観世音像を前に、一心に笛を吹き続けているのは、近寄りがたい気品をそなえている一人の僧だった。

村人たちは思わず、すすきの河原にひれ伏した。間近かに聞く笛の調べが、ひとりひとりの胸にしみこむ。鳴きしきる虫の声もしだいに静まりかえっていく。

どのくらいたったろうか。笛の調べがぴたりとやんで、お経を読む声に変わった。村人はおごそかな声に手を合わせて聞き入った。

そのお経が終わるのを待ちかねたように、足音が近づいてきた。村人がおそるおそる顔を上げると、りっぱな武士が僧の前にひざまづいていた。

「中納言様、都のようすをお知らせにまいりました。」

その声に静かに立ち上った僧は、観世音像をおしいだきながら、武士をしたがえ、立ち去っていった。二人の姿を見送った村人たちは、目を疑うように顔を見比べていた。

その日から、村人たちは仕事を早めに切り上げては笛の調べに耳を傾け、疲れをいやすようになった。

ある日のこと、いつものように河原にきた村人の前に、武士がすすみ出てきていった。

「みなの者、よく聞けよ。ここにおられる方は、万里小路中納言藤房卿（註１）といわれる尊いお方である。都では、高い位について天子様の政治をたすけ、天下一の忠臣といわれておられた。だが、わけがあって、その位をしりぞき、 今は出家の身になられ、ここにかくれ住んでおられる。わたしは、はるばるたずねあててきたが、いつまでもここにいるわけにはいかない。

そこで、わたしの留守中、中納言様にごふ自由のないよう心をつくして、おつかえ申してくれ。」

武士はそういい残すと、名ごり惜しそうに、旅立っていった。それから村人たちは朝な夕な見野山にある草庵（註 2）を訪れては心をこめて藤房卿につくし た。

藤房卿が都をしのびつつ笛を吹いた河原（今の見野橋の下流）を「笛吹き河原」と呼ぶようになった。

また、藤房卿がここにいて都のようすを聞き集めていたというところから、山根地区は別の名を「聞(きき)が沢」ともいわれている。

この話のころからおよそ 400 年たった、明和(めいわ)4 年（1767 年）見野山に山崩(くず)れがあり、そこから観世音像や多くの古銭が見つかった。村人はそれらは藤房卿の遺品にちがいないと、長光寺にていねいにおさめた。

弘化四年（1847 年）には社殿を改築し、その遺品を近くに埋め、藤房卿を祀ったのが喜久沢神社である。

（註 1）　南北朝時代の人（ 生没年不明 ）

後醍醐(ごだいご)天皇（1318 年即位）につかえ、建武の親政には恩賞方(おんしょうがた)・雑訴(ざつそ)決断所(けつだんしょ)等の要職についた。天皇の政治についてたびたび忠言したがいれられなかったため職をしりぞき、出家し身をかくしたまま、行方がわからなくなったと伝えられる。歴史上、なぞの人物とされている。

（註 2）　草ぶきの仮のすまい

あとがき

私はいわゆる登山愛好家である。しかし、世界の山々をめざそうとか、日本百名山とかを目指すつもりはないし、強いて言えば興味がない。あえて言うなら、私は旅愛好家であり、鹿沼三十三観音を巡ったり、あるいは鹿沼三十三名山を選定して登ってみたいと思う。そして自分が生まれ育った鹿沼の山々にある植物などの自然を知りたいと思う。しかし、それはいつでもできるであろう。僕が今知りたいのは、自分の生まれ育った鹿沼で、一生けんめい生きぬいた人たちの生きざまである。歳を重ねてくると、自分の残り時間を惜しむことよりも、何とか生きぬいて自分の一生をまっとうしたいという思いが芽生えてくる。鹿沼でがんばって生きぬいた先人たちに、私は学びたいと思う。（阿部良司）

小さな旅クラブ　６月までの予定

２月 23 日（日）　茂木、仏頂山～高峰

小貫観音堂、安楽寺、荒橿神社、能持院　ウグイスカグラ

３月１日（日）　鹿沼三十三名山・地蔵岳（1483m、人の世は闇）と夕日岳（1526m、苺に夢中）

鹿沼三十三観音･第二十八番「こびの木観音」

３月８日（日）　安蘇、赤雪山と名草巨石群

３月 15 日（日）　会津、版画・仏教美術・グルメの旅

斎藤清美術館、圓蔵寺、恵隆寺観音堂（立木観音）、勝常寺（薬師堂）、田子薬師堂、弘安寺（中田観音）、末廣酒造カフェ杏、渋川問屋（昼食）

３月 20 日（金）　鹿沼三十三名山・岩山（328.2m、山頂に着くのは三時ヤニ）と深岩山（333m、さ、さ、さ、三時？）

鹿沼三十三観音･第三十一番　深岩山満照寺　アズマイチゲ

４月５日（日）　上州、子持山　子持神社

４月 12 日（日）　鹿沼三十三名山・三ノ宿山（1229m、いちに肉）～大木戸山（1286m、いちにハム）　清滝寺、清滝神社

４月 19 日（日）　日光、鳴虫山　浄光寺、観音寺　アカヤシオ

５月３日（日）　奥多摩、川苔山　奥氷川神社

５月５日（火）　安蘇、三滝より氷室山　鹿一瓶塚稲荷神社

５月 10 日（日）　日光、隠れ三滝と大山　ズミ、トウゴクミツバツツジ

５月 17 日（日）　秩父、両神山　秩父神社

６月７日（日）　会津、田代山　オサバグサ

６月 14 日（日）　西上州、史跡巡りとグルメ旅

富岡･富岡製糸場、一之宮貫前神社、妙義神社（社殿の背後にそそり立つ大岩壁）、下仁田･常住寺、安養山清泉寺、中之岳神社

６月 21 日（日）　日光、太郎山　アズマシャクナゲ

本号の内容

柳田芳男「かぬま郷土史散歩」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

武蔵大学人文学部日本民俗史演習「鹿沼市見野の生活と伝承」　・・・・・　9

「喜久澤神社雑話」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

鹿沼のむかし話を集める会「子どものための鹿沼のむかし話」　・・・・１２

あとがき　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４

小さな旅クラブ　６月までの予定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

鹿沼に生きた人、生きている本・創刊号

2020年2月発行

小さな旅クラブ　鹿沼

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人　阿部　良司

携帯　090－1884－3774

FAX　0289－62－3774

携帯✉shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail　tw244873@jg8.so-net.ne.jp